

平成30年6月18日現在

機関番号：64401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16906

研究課題名(和文)世界文化遺産バンチェン遺跡と地域社会：住民の生活史の視点から

研究課題名(英文) Ban Chiang World Heritage Archaeological Site and Local Society: From the Perspective of Villagers' Life History

研究代表者

中村 真里絵 (NAKAMURA, MARIE)

国立民族学博物館・学術資源研究開発センター・外来研究員

研究者番号：20647424

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文化遺産と地域住民の関係について、タイ国ウドンタニー県の世界遺産バンチェン遺跡を事例に分析した。特に1960年代のバンチェン遺跡発見以降、地域住民らが遺物や遺跡をめぐる世界的動向に巻き込まれてきた様相を、インタビュー調査によって明らかにした。これまで、バンチェンの祭りやイベントにおいて、村の歴史は積極的に共有されてきた一方で、盗掘や遺物販売などネガティブなイメージを含む村人の経験は共有されずにきた。現地調査のデータによって、むしろこの後者のこれまで共有されてこなかった個人の歴史を通じ、村人が遺物や遺跡との紐帯を強めてきたことがわかった。

研究成果の概要(英文)：The study analyzed the relation between cultural heritage and local residents in the Bang Chiang Archaeological Site of World Heritage Site in Udon Thani province, Thailand. In particular, the interview survey revealed one aspect of local residents' life that is they were involved in activity relating to relics and ruins since the discovery of the ruins in the 1960s. While the vivid history of the village over the past 50 years has been visualized by festivals and shared among villagers, the history of individuals such as robbery and relics sales made by them have not been disclosed. From the collected field data, it is clarified that the villagers have found meaning in living in Ban Chiang through personal experience and their consciousness of contribution to preservation of cultural heritage has been grew significantly.

研究分野：文化人類学

キーワード：世界遺産 遺物 遺跡 ライフヒストリー タイ国

1. 研究開始当初の背景

現在、ユネスコによる世界遺産登録は、地域の文化保存や観光産業を促進することから、国の重要な文化活動であると同時に、国際的関心事となっている。一度、登録されるとその土地は公共性を帯びるため、地域住民の権利や自由が制限される側面もある。こうしたなかで、文化遺産をめぐる動向に地域住民がどのように取り込まれていったのか、特に住民の生活史の視点から照射することは、文化遺産と地域住民の持続可能な関係性を構築するために必要である。しかし、これらに関する研究は、近年に始まったばかりであり、今後の研究が待たれる分野でもある。本研究は、こうした分野に貢献するため、世界遺産のパンチェン遺跡を事例に、東南アジア史において最大の事件の一つといえるパンチェン遺跡発見が地域社会に与えた影響について、現地調査によって得られたデータから明らかにする。主に1960年代の発見以降現在にいたるまでの村人の生活史を再構成するとして開始した。

1992年に世界遺産に登録されたパンチェン遺跡は、タイ東北部ウドンタニー県に位置する先史時代の埋葬遺跡である。1960年代に人骨とともに多数の副葬品が発見され、これまでの東南アジア史を塗り替える可能性がある遺跡として、年代測定をめぐって学術界から注目を浴びた。さらに、土器や青銅器、ビーズなどの遺物が骨董品として、古美術商やコレクターらの間で一大ブームが巻きおこり、国内外へと流出したことで知られている。この遺跡発見により、東北部の田舎の村が突如として世界の注目を浴びることとなり、村人たちの生活は大きく変容することとなった。しかし、パンチェン遺跡に関する論考は、発掘調査の成果や古美術的価値を評価するものに限られ、地域住民の生活にまで踏み込んだ調査研究はほとんどない[今村 1982、チン ユーディー 1974、Gorman and Charoenwongsa 1976]。そのため、1960年代以降のパンチェン遺跡をめぐる動向に村人らがいかに巻き込まれて、生活が変化したのか、その実態の詳細は明らかになってこなかった。しかし、パンチェン遺跡発見から50年が経った現在、時代の証言者らが減少するなか、遺跡発見のインパクトおよびその後のブームを地域住民の視点から再考し民族誌的研究として提出する本研究は、文化遺産と地域住民の関係性の望ましいあり方を考察する上で貢献しうるものである。

《参考文献および参考 web サイト》

今村啓爾 1982「パンチェン文化の古さ」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第1号 pp.215-234
チン ユーディー 1974「先史時代におけるパンチェン」(中沢侑子訳)『文化朝日アジアレビュー』5(2)pp.48-55
Gorman, C. F. and P. Charoenwongsa 1976 Ban

Chiang: a mosaic of impressions from the first two years, Expedition, 18(4):14-26. Pennsylvania University:
<http://isearchaeology.org/background/>

2. 研究の目的

本研究は、タイ東北部に位置する世界文化遺産であるパンチェン遺跡が1960年代に発見された以降の社会変化について、村人の生活史から明らかにすることを目的とする。当該遺跡は、発見当初から、年代測定に関する議論や出土遺物の骨董品化、観光開発の波に翻弄されてきた。パンチェン遺跡の範囲は村人の居住地域と重なるため、地中から多量の遺物が発見されたことにより、村人らは大きな影響を受けた。本研究は、この遺跡をめぐる動向に、地域住民らがいかに取り込まれてきたのか、いかに外部者とかかわってきたのか、それとともに彼らの遺跡や遺物に対する意識がいかに変化していったのか、彼らの生活史に関する聞き取り調査から明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、全期間を通じて、パンチェン遺跡発見以降、遺跡をめぐる動向に直接あるいは間接的に関わってきた人々へのインタビュー調査を重点的におこなった。具体的には次の通りである。発掘に関わった村人、盗掘経験のある人、遺物販売仲介人、博物館研究員と従業員、土産物販売人、レプリカ製作者、土産物制作者、教育関係者、行政関係者、考古学者、文化庁芸術局の研究者などである。

(1)平成27年度は、研究対象地であるパンチェン遺跡の全体像を把握するための参与観察と地域住民へのインタビュー調査を実施した。主にパンチェン遺跡の発掘調査に従事した人びとを中心に、ライフヒストリーを収集した。さらに、発見からブームの時代のパンチェンの様子を知るタイ人考古学者と日本人考古学者へのインタビュー調査の他、毎年2月に開催されるパンチェン世界遺産祭りの調査をした。

海外での現地調査は、8月14日から9月11日まで、2月8日から3月8日まで、タイ国ウドンタニー県、パンチェンおよびバンコクにて実施した。

(2)平成28年度は、前年度に引き続き、パンチェンに居住する地域住民への聞き取り調査を実施した他、新聞記事等の文献収集、国内では南山大学人類学博物館所蔵のパンチェン土器のコレクション調査を実施した。

海外での現地調査は、7月25日から8月25日まで、および2月27日から3月19日まで、タイ国ウドンタニー県、およびバンコク等にて実施した。

(3)平成 29 年度は、これまでのデータを整理しつつ、村人の遺跡にかかわる生活史について不足分のデータを収集した。

海外での現地調査は7月2日から22日、および2月6日から3月6日まで、タイ国ウドンタニー県およびバンコクにおいて実施した。

4. 研究成果

(1)考古学会へ与えた影響：バンチェン遺跡発見は日本考古学界にも衝撃を与えるほど大きな出来事であった。これを契機に日本人考古学者らのあいだでも東南アジア考古学についての関心が高まり自主勉強会が始まり、それが1977年の東南アジア考古学会発足へとつながったという。

当時、形式学重視の立場をとっていた日本人考古学者らの間では、アメリカが出したサーモルミネッセンス年代測定によるバンチェンの年代値に対し、あまりにも古い値が出過ぎていると疑義が出ていたという。しかし、当時、欧米考古学者のあいだには科学的年代測定法を重視する傾向にあり、それらの声は届かなかったという。のちに修正された年代値は、日本の考古学者らが想定していた年代観とほとんど一致していた。

(2)バンチェンのブームの様相：これまでバンチェンの遺物の多くは、主に1970年代に骨董品としてタイ国内外へ流出したことは知られてきたが、その実態は明らかにされてこなかった。調査データから、このブームの時代、バンチェンはこれまで想定されてきた遺物がバンコクを経由して海外へと流出するという単線的な関係ではなく、周辺地域やラオス、カンボジアをも巻き込む複層的な関係があったことがわかった。具体的には、バンチェンの遺物が減少すると、村人は東北部の他地域から同時代の遺物を掘り出し、それらをバンチェンの遺物として販売していった。さらにバンチェンに遺物が集まってくるのにもなって、カンボジアやラオスから古布が持ち込まれ、それらはバンチェンを経由して、バンコクや海外へと売られていったことが明らかになった。それらは、バンコクのウィークエンドマーケットや骨董品街でも取引されていた。

(3)バンチェン遺跡とタイ王室とのつながり：1972年にプミボン前国王がバンチェンに行幸したことは村人にとって、重要な出来事として記憶されており、インタビュー中においてもしばしば語られていた。行幸時の写真はバンチェン国立博物館の展示および世界遺産祭りなどのイベントの場において、頻繁に用いられ、バンチェンと王室との関わりを示す重要な材料となっている。また、国王がバンチェンの文化財を後世に大切に残すべ

きであると、村人に助言したと伝えられている。1970年代当時のタイの社会背景として、王族が北部国境付近の村などを重点的に訪れ、タイの国民国家の基盤構築をはかっていたことなどを考慮すると、バンチェンでは、遺跡や国立博物館を介し王室との関わりを視覚化することを通じて、地域住民らはタイ国家の枠組みに強固に取り込まれていったともいえる。一方で、村人たちにとっては、この王室とのつながりが、彼らと遺跡、そして国家との結びつきを強めていく側面があった。



写真1 国立博物館の門に飾られる国王行幸時の写真

(4)遺物と村人の関係性の変遷：遺跡発見以前まで、村人たちは長い間、遺物をただそこにある古いモノ、あるいは遺物の持ち主であるお化け(白骨)の所有物として畏怖する対象としてとらえてきた。その後、遺跡に世界的注目が集まり、骨董商らがやってくるようになると、遺物は換金可能な商品となった。村人らは需要に応じて、屋敷地を掘り起こし、可能な限り遺物を持って、大金を手にするようになった。発見から50年経った現在では、村人らは、遺物を博物館に保存すべき文化財として認識している。しかし、村人は、遺物は文化財として大切だと語る一方で、現在でも遺物を個人的に所持し続けていることもわかった。彼らはビーズをネックレスにし、特別なイベント等の装飾品として身に着けたり、自分を守るお守りとして日常的に身に着けたり、土器を古くて霊験あらたかなモノとして祭壇に祀ったりしていた。これらの事例から、村人にとって遺物は、博物館に保存すべき文化財であると同時にお守りや記念品として個人で保存する思い入れのあるモノでもあることがわかった。遺物を個人で持つことは、保存の実践の多様なあり方の一つとして捉えられる。



写真2 遺物が故人の写真や神像とともに祀られている

(5)共有されない個人の記憶：バンチェンでは、博物館や公式行事などで積極的に語られる定式化された歴史がある一方で、遺跡や遺物にかかわる個人の経験や記憶は明かされてこなかった。後者には盗掘や遺物販売、複製品の製造などが含まれる。村人のライフヒストリーの聞き取りの過程で、村で共有されていく歴史と個人の経験にはズレがあることがわかった。本研究を通じて、共有されていく地域の歴史からとりこぼれていく個人の経験を拾いあげていくことで、それらのズレが明らかになるとともに、バンチェンの人々の生活史の詳細が明らかになった。

(6)遺物の流出：かつて遺物の盗掘、販売をしていた村人らからは「遺物の8割が外に流出した」「良い物はほとんど売ってしまったから、質の高い遺物はタイには残っていない」という言葉を聞いた。こうした言葉からは、膨大な量のバンチェンの遺物が国外へ流出したことがうかがえる。遺物の主な流出先の一つであった日本においても、個人コレクションや大学博物館のコレクション等、一部の所在がわかっている。バンチェンにおいては、2013年にアメリカから557点の遺物が返還された。本研究期間では、流出した文化財の所属をめぐる議論については踏み込めなかったが、今後、検討を加えていきたい。

5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計4件)

NAKAMURA, Marie, “Community and Individuality: Sharing Memories about

Relics in Ban Chiang ”、査読有、Full paper of 13th International Conference on Humanities and Social Science(IC-HUSO) 、2017、pp.2572-2578.
http://hs.kku.ac.th/ichuso/Panel_48.pdf

NAKAMURA, Marie, “ How Did Villagers Become Preservers of the World Heritage? :the Case Study of Ban Chiang Archaeological Site ” 査読無、Full paper of 13th International Conference (ICT13)、2017、pp.1074-1085.
http://www.icts13.chiangmai.cmu.ac.th/download_pub.php?ct=cMXxfhstXNgdImByDA|plus|Lv0b|plus|&

中村真里絵、「東北タイ焼物づくりの村から」『季刊民族学』、査読無、40巻4号、2016、pp.91-103.

中村真里絵、「バンチェン遺跡ブームとその後」『月刊みんぱく』、査読無、40巻7号、2016、pp.16-17.
http://www.minpaku.ac.jp/sites/default/files/museum/showcase/bookbite/gekkan/1607_16-17.pdf

〔学会発表〕(計6件)

中村真里絵、「世界遺産バンチェン遺跡における文化人類学調査の研究報告(タイ語)」、ウドンタニー・ラチャパット大学 芸術文化センター特別講演、2018年2月21日、ウドンタニー、タイ国

NAKAMURA, Marie, “ Community and Individuality: Sharing Memories about Relics in Ban Chiang ”、13th International Conference on Humanities and Social Science(IC-HUSO)、2017年11月3日、Khon Kaen(Thailand)

NAKAMURA, Marie, “ How Did Villagers Become Preservers of the World Heritage? : The Case Study of Ban Chiang Archaeological Site ”、13th International Conference (ICT13)、2017年7月16日、Chiang Mai (Thailand)

中村真里絵、「世界遺産バンチェン遺跡に生きる：村人たちのライフヒストリーから」、『上智大学アジア研究セミナー 2016年度第4回「バンチェン遺跡：考古学と人類学からみる地域の歴史と人々」(第253回東南アジア考古学会例回セミナー)』2017年1月28日、上智大学、東京

NAKAMURA, Marie, “ Using life-history for Public Archaeology: The case of Ban Chiang in Northeastern Thailand ”、The 8th World

Archaeological Congress (WAC-8)、2016年
8月29日、同志社大学、京都

中村真里絵、「東北タイ、世界文化遺産パ
ンチェン遺跡における博物館と地域住民」、
『国立民族学博物館・金沢大学 研究フォー
ラム「文化遺産の保存と活用：ミュージアム
の視点から」』、2016年3月26日、国立民族
学博物館、大阪

〔図書〕(計2件)

NAKAMURA, Marie、National Museum of
Ethnology、“Soil/Dirt(Clay)”、IKEYA,
Kazunobu(ed.) *BEADS IN THE WORLD*、2018、
pp.26-27.

中村真里絵、国立民族学博物館、「土」、池
谷和信(編)『ビーズつなぐ・かざる・み
せる』、2018、pp.26-27.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕(計1件)

柿崎一郎、中村真里絵、2017年11月26日
放送「全部見せます！タイの世界遺産」
TBS テレビ『世界遺産』監修

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 真里絵 (NAKAMURA, Marie)

国立民族学博物館・学術資源研究開発セン
ター・外来研究員

研究者番号：20647424

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし